「明治維新」とは何であったのか

作家　**原田 伊織 氏**

【司会】 それでは、ただいまより第２回MURCオープンカレッジをスタートいたします。本日、ご登壇いただく先生は原田伊織先生ということで、皆さん、何人ぐらいお読みになりましたか。（会場でかなりの挙手）それなりに多いですね。ありがとうございます。奥書のところのプロフィールをそのまま読ませていただきます。作家。クリエイティブディレクター。昭和21年京都・伏見生まれ。近江佐和山城下、彦根城下で幼少年期を過ごし、大阪外語大学を経て広告、編集制作の世界へ。現在も、マーケティングプランナー、コピーライター、クリエイティブディレクターとして活動していらっしゃるということで、その原田先生が何で歴史書を？というのは、これから追い追いと先生から伺いたいと思います。まずは１時間ばかり、ご講演をよろしくお願いいたします。（拍手）

講　演

歴史を身の内に入れる

原田でございます。きょうは、お招きいただきましてありがとうございます。よろしくお願いいたします。

お手元の資料、「「明治維新」とは何であったのか」という、これに沿って全部お話できればよろしいんですけれども、１時間というお時間ですので、若干はしょらせていただくことがあるかと思います。ただ、それぞれ事例として挙げていることも多いものですから、皆様の場合は「釈迦に説法」という部分もたぶん多いと理解しておりますので、逆にポイントになる部分で、これはどうなのだという点については、後で質疑の時間も設けていただいているようでございますので、そのときにでもぶつけていただければありがたいと思います。

私自身、今ご紹介いただきました通り京都・伏見というところで生まれまして、酒蔵のあるところですが、ちょ

うどこの本で扱っております幕末動乱のときには、一番物騒なエリアでもあったというところです。母方の祖父が、私から言いますとひいおじいさんになりますけれども、幕末のころにちょうど京都へ出てきた。それ以来、両親は京都であったわけですけれども、それから後、私自身は琵琶湖のそばで育つことになるのです。このように身近な人間に置き換えてみますと、幕末動乱と申しましても、せいぜいそんな時間・距離だということですね。それで、いろいろな著名な歴史上の人物を横に並べてみましても、ああ、このときに母親が生まれたのかとか、おじいさんはどうだったのか、そういう見方をしていただきますと非常に歴史が身近になるといいますか、いわゆる「鎌倉時代がね、奈良時代がね」ということとは、また違った意味で身の内に歴史を入れていただけるのではないかと考えております。

たとえば新撰組、芝居になったり映画になったりしており、誰でも知っている素材ではあります。新撰組で一番長生きをしたのは永倉新八でしょうか、大正６年に亡くなっておりますけど。ということは、私の父親が大正４年生まれですから、というふうに身近になるわけでして、せいぜいそんなものだということを感じてください。たとえば司馬遼太郎さん、幕末の歴史については司馬遼太郎さんの著作に負うところが私たちは大きかったわけですけれども、あの方は新撰組のことを書く場合、ずい

ぶんいろいろな方にインタビューをされています。それで新撰組は、最初は壬生の屯所にありました。行かれた方もおありかと思いますが、その壬生の屯所のそばにお寺がありまして、そこの境内で子供たちが遊んでいる。そのときに子供好きの隊士が何人かいて、たいがい近所の子と遊んでいる。そういう方が、司馬さんが昭和30年代にインタビューされたときには80代になっていらっしゃったりということですね。直接インタビューされている。そうしますと、「新撰組の誰それと私は遊んでもらったよ、あそこで」ということになるわけでして、その辺は、非常に私は司馬さんが羨ましいですね。たぶん、そうやって身近なところにひとつスケールを、物差しを置いてみて、歴史というものを、年号を暗記するということではなくて身の内に入れていただくことが、おそらく皆様の日々のかなり高度な難しいお仕事のうえでもなんらかのヒントになるのではないかという思いもいたします。

官軍教育の誤り

本日のレジュメに３つ、最後を含めますと４つぐらいになりますが、項目を挙げさせていただきました。ひとつは「官軍教育の誤り」ということで、もうひとつは「司馬史観の罪」です。これはあえて申しますが「罪」ということ、それで「「明治維新」という過ち」、これは本当に過ちであったのかどうかという大問題ですけれども、私は今の時点で、どちらかといえば民族としてひとつの大きな過ちではなかったか、それは一回検証してみてはどうでしょうかというのが今回の著作といいますか――実は３部作ということで来月も１冊上梓させていただきますが、過ちではなかったか、それは検証してみる価値があると考えております。

そして、一番最後に「世界は「江戸」に向かっている」ということを１行、項目だけ書かせていただきました。これも今年中には、なんらかの最初の問いかけを皆様方にもできればと考えておりまして、９月末までには原稿も用意したいという、そんなスケジュールです。「江戸」と、あえて鍵括弧をつけまして「江戸」、江戸システムのこと

大島氏

なのか、江戸の価値観なのかということですが、いずれにしても、一言で申し上げれば「世界は今「江戸」に向かっている」という考え方をしております。ですから、明治維新というもの、あるいは幕末動乱の出来事の延長線上として、私自身がゴールといいますか、ひとつのゴールですけれども、世界中が今の行き詰まりを脱してどこへ向かったら正解かと考えるかというときには、これは「江戸」に向かっているでしょうという、身近な現象でそのことを解き明かしてご説明できるのがベターかなと思っておりまして、その作業を続けていきたいと考えております。

最初に「官軍教育の誤り」についてです。明治維新あるいは幕末動乱に関する今の教育、あるいはそこで教えられる内容といいますか、それを一言で「官軍教育」というふうに言っております。これはたぶん、幕末を扱われる方皆様はこの表現をお使いになると思います。別の言い方をさせていただければ「薩長史観」という言葉があったり、やはり「官軍史観」、「薩長史観」という言い方が一番多いとは思います。ご存じの通り、薩摩・長州というのは勝ち組でありまして、薩長土肥という言葉がありますが、実質的には薩摩･長州、さらに突き進めていきますと、西南の役以降は特に長州です。「長閥」――長州閥のことを「長閥」と呼んでおりましたが、言ってみれば「長閥」の体制といいますか、政治的価値観といいますか、それが平成の今も続いているという考えをしております。

「古事記」、「日本書紀」がそうでありますように、だい

たい歴史書といいますのは、あるいは歴史そのものは勝者が書くものでして、そのこと自体をあまり責め立てても、これはしようがないことだと思います。問題は、それを何百年も放っておかないことだと思っておりまして、普通の民族――普通の民族と言い方も非常に漠としておりますが、今、地球上におります普通の民族国家の場合、100年、200年もたちますと、たいがい自分たちの歴史を振り返って検証してみるというのが普通の営みであろうと思います。ただひとり、日本がやっていないといえばやっていない。思い切り長い時間軸を今から過去にさかのぼって引いてみて、その上に幕末以来の出来事を、どちら側につくかはちょっと置いておきまして、どちら側についたとしても、都合のいいことも、都合の悪いことも誇張せずに、あるいは隠さずに、一回フラットに並べてみましょうという、検証というのはそういうことでまずはよろしいかと考えております。

そういう視座に立ちますと、今の官軍教育というのは、この辺が違うのではないですかということがいっぱい出てくるということですね。2種類に分けて、史実を隠蔽しているという側面、もうひとつは史実を歪曲しているという側面があります。レジュメにいくつか挙げておりますのは、その事例としてお考えください。たとえば、京都を舞台にして日本の夜明けを信じて勤皇の志士たちが、映画ですと鞍馬天狗の助けをかりまして――「鞍馬天狗」をご存じないですか、ひょっとして。ご存じですか。嵐寛寿郎ですね。私たちは「アラカン、アラカン」と言って、ああいうモノクロ、砂嵐が降るような映画しか見る機会がなかった昭和20年代というのがありますけれども、アラカンが鞍馬天狗で、杉作が松島トモ子でしたね。白馬にまたがって格好よかったですね。「月光仮面」の元祖かなという気もしますけど。桂小五郎、正義の志士ですね、勤皇の志士ですから。正義の志士桂が危ない、どこからともなく鞍馬天狗がさっとあらわれて「杉作行くぞ」みたいな、そんなシーンで、ああいうシリーズを何本見ましたか。ですから、エンターテイメントの世界においても、ある意味勤皇史観といいますか、「勤皇が正義で佐幕は悪」という非常に明瞭な色分けがなされていた。分かりやすいですね。非常に分かりやすかったです。

そういう京都で勤皇の志士が活躍していたということですが、実際に活躍というのは何をやっていたか。これは史実に照らしますと、はっきり申し上げて「テロ」ですね。暗殺というのはテロだとすると、彼らのやっていたことは、ほとんどがテロリズムに該当すると思います。

勤皇の志士はテロリスト？

いくつかざっと読み上げますと、たとえば安政の最後、安政7年というのは万延元年のことでもありますけれども、西暦で申し上げますと1860年です。大江さんの「万延元年のフットボール」という、あの万延ですね。イギリス公使館の通訳・伝吉という男が暗殺されております。大老である井伊直弼が江戸城の桜田門外で暗殺されております。ご存じのとおり「桜田門外の変」というものですね。イギリス人の水兵2名、イギリスの仮公使館で暗殺をされております。このときの犯人は松本藩の藩士。また、土佐藩の吉田東洋が暗殺されております。これは土佐勤皇党・那須信吾という男がおりまして、これが犯人ですね。これの弟が後の宮内大臣をやっております田中光顕です。それから、摂関家のひとつであります九条家の家臣・島田左近という侍が暗殺されております。これは薩摩の田中新兵衛が犯人です。同じく九条家・宇郷重国も暗殺、これは土佐勤皇党の岡田以蔵――岡田以蔵というのは、ひょっとしたらご存じかもしれませんね。「人斬り以蔵」「人斬り半兵衛」とかいろいろ言われておりました。だいたい、「幕末四大人斬り」というのがありまして、日本三景じゃあるまいし、人斬りに四大人斬りというのもどうかと思いますが。だいたいそういう覚え方が好きですね、私たち日本人は。人斬りの場合は、どういうわけか四大人斬りになりまして、金閣寺の寺侍・多田帯刀、これは、実は井伊直弼の右腕といいますか、懐刀と言われた長野主膳の側室の子供なんですが、多田帯刀が暗殺等々、これずっといきますと、結構何ページにもなるんですね。

たとえば、こういう場でちょっとあれですけれども、目明し猿（ましら）の文吉という男の暗殺は非常に残虐でして、竹を肛門から突き刺して、脳まで全部それで貫き通して、そのままの形で串刺しのようにして町にさらした。この手の殺し方がやたら多い。たいがい殺された人間は手足ばらばら、あちこちに、こっちの屋敷に右手を放り込んでおく、こっちの屋敷に首を放り込んでおくみたいなことがあります。佐久間象山も暗殺されております。たとえば冷泉為恭という絵師がいましたけれども、これはひどかったですね。箔をつけるため、かなり長期間追いかけ回した。この犯人は長州藩士ですけど、絵師だったら殺しやすいと思ったのかどうか。それで自分はまだひとりも殺っていないのでどうもひとりぐらいやっておかないと仲間内で発言力がないというひどい話なのです。これは実際にあるんですね、実は伊藤俊輔、後の伊藤博文ですけれども、彼がやった暗殺もそれですね。幼いころからの仲間といいますか井上聞多、後の井上馨ですけれども、これと一緒になってということが多いんです。伊藤は儒学者を殺しておりますが、それ以外にもいろいろと殺っているんです。そのことは、たとえばアーネスト佐藤というイギリス公使館の書記官ですが、「一外交官の見た明治維新」ですとか有名な著書がありますけれども、彼らの記録にも出てくる話です。そのとき伊藤は、何も言わないけれども、にやにやしていたというようなことで、高輪のイギリス公使館ができたときも、あれを焼き討ちしたのも、伊藤、井上、高杉といったあたりですね。

もともと薩摩・長州というのは後ろ盾としてイギリスの支援を受けておりましたので、イギリスも明治になってからもそんなにぎゃあぎゃあ言っていないんですけれども、すべてそういう補償といいますか賠償は幕府がやりました。ずいぶん金を使っていますね。

下関で４ヵ国の艦隊を砲撃した事件というのはご存じかと思いますが、あのときの賠償金も幕府が払いました。薩英戦争のとき、薩摩では、東郷平八郎たちがまだ15～16歳というときですけれども、あの賠償金も幕府が払っております。そういう点でいいますと、幕府財政も大変なんですね。

つまり、こういうことが全部隠されてきたということです。私は鞍馬天狗しか信じていなかったものですから、実態はこういうことだったのかと驚きました。

「鞍馬天狗」の中で「桂さん、日本の夜明けは近い」みたいな台詞があったかと思うのですけれども、じゃ、その桂さんはこのときどうしていたのか。実は彼は長州の激派、過激派とも激派とも言いますが、それのリーダーでした。ただ彼は非常に巧妙といいますか、慎重といいますか、当時のニックネームが「逃げの小五郎」と言いまして、危険からは必ず距離を置いて逃げる。池田屋騒動のときもそうです。あれはたぶん、私は計算して逃げていると思います。知っていたと思いますけれども、そういうことで、こういうことは全部隠蔽されてきたということです。

「鎖国」は存在しない

そして、私たちが意外に基本的なことで大きな錯覚をしているのが、「鎖国」の実態です。そもそも日本は江戸期、「鎖国」をしていたのかどうか。そして、「鎖国」というのは何なの。実は、国をがっちり閉じていたという事実はありません。江戸４口、函館――函館のことは正式には蝦夷口、そして、長崎出島でご存じの通り長崎口、対馬口、もうひとつは薩摩口、この４つの口が幕府公認の対外窓口でありました。特に後々問題になりますのは対馬口です。ここには朝鮮半島から、朝鮮通信使というものが江戸期に13回来ていますので、単なる交易だけではないのです。その通信使の記録が、日本と韓国では解釈が違っているという問題が今新たにありますけれども、あれはちょっと別問題でして解釈の違いようがないんですね。時の政権が都合のいいところをどう利用するかというだけの話でして。

では、「鎖国」というのは何だったのか。「鎖国令」というような法令があって、それで出入国を禁止したのかというと、そんな事実はありません。そもそも「鎖国令」という法律もありませんし、「鎖国」という言葉が一番最初

にあらわれたのは西暦で申し上げますと1800年です。しかも、それはケンペルというヨーロッパの方から来た医者が帰国して、発表したのはドイツで発表したかと思うのですが、彼の論文の中に出てくる言葉のある部分を「鎖国」と訳しただけです。

そのころの日本では書籍は、版木をつくってかなり流通はするのですけれども、これについては写本しかないので、一般には一切出回っていないですね。ということは江戸期に、少なくとも1800年には「鎖国」という言葉は誰も使っていないし、知らないということになります。「鎖国」は、実は明治以降に普及した言葉です。

しかも、そのケンペルの論文といいますのは、ある意味管理貿易のひとつの形であり、それが、そのときの日本の国情に照らして、それがいかに合理的かということを論文にあらわしたもので非常に肯定的なんですね。事実、明とも交易は続いている。明が清になっても同じことです。そして、シャム、ルソン、長崎口ではオランダという形で、確かに細々とではありますけれども、海外との交易はずっと続いている。「鎖国令」という令も存在しないし、完璧に国を閉じたという事実もありません。そこも大きな誤りです。公教育においては、この4口のことは、たぶん私たちは何も知らされていなかった。ですから、これは「明治新政府がこうこうこうして、やっと日本は国を開いてヨーロッパの文明を取り入れてこうだよ」と、明治維新を肯定するためにということでしか考えられない。鎖国ひとつ取り上げてもそういうことになります。

「薩長同盟」も存在しない

では、歪曲の方になるとどうなるか。たとえば有名な薩長同盟と坂本龍馬についてですが、実は「薩長同盟」という同盟は存在しません。特に軍事同盟として存在したかのように言われますけれども、両者が一緒になって幕府を倒したということは事実無根であります。さすがに、最近になって多くの学者の方も気が引けたのか、「薩長同盟」という言葉は使わなくなりました。でも、急にというのも何なのでしょうね、やはりできないので「薩長盟約」というふうに学者の皆さんはおっしゃるようになりました。となれば、薩摩と土佐の「薩土盟約」とかもありますし、その程度みたいなことになるのですが、この薩摩と長州の盟約というのはいいかげんな話でありまして、これが結ばれる――結ばれるというか、もし同盟として結ぶのであれば、せめて覚書1枚、契約書的な何かがあって然るべきです。それを桂（木戸）と西郷が契ったということであれば、両者が署名した書面があって然るべきです。しかし、それは一切存在しません。

どういうことかといいますと、確かに、彼らは京都の薩摩屋敷で会っています。ただ、その2～3日後ぐらいですけれども、木戸の方から、つまり桂の方から、そのとき一緒にいた坂本に対して手紙を出しています。「あのとき西郷と話したのはこうこうこういうことだったよね」と確認の手紙を出しています。そのときに坂本の方で、「ああ、そうですよ。それで間違いないですよ。私もそれで聞いていますから間違いないですよ」という返事をしました。実は、それだけの話です。それが今、「薩長同盟」という仰々しい話になっているのです。

そもそも、この会談の半年前に下関で長州はすでに薩摩の力をかりていますし、先ほどの伊藤俊輔、伊藤博文ですけれども、それと井上聞多、いつもこの2人は一緒ですが、彼らが長崎の薩摩屋敷に薩摩藩士という名目で出入りしているんですね。それは確認されていまして、なぜかといいますと、グラバー商会経由で、薩摩が入ってグラバーが入って長州が入って、三角形で密貿易をし

ていたのですね。武器の密貿易、これのために井上も伊藤も薩摩藩士という名目で長崎に入っている。つまり、薩摩と長州はその時点でそういう関係であったということですね。そのとき長崎の薩摩屋敷にいたのは小松帯刀ですから、これは公然と、といいますか、両者の間ではそういう関係が成立していた。それから半年たって京都で３者がどうこう言ったって、これは今さら何を言っているのということで、時間的にも薩長同盟というのは、言われているような同盟は存在しないということになります。これはひとつ、歪曲の事例になるかと思います。

「坂本竜馬」と「坂本龍馬」

もうひとつ申し上げますと、坂本龍馬についてです。坂本龍馬といいますと、司馬遼太郎さんの「竜馬がゆく」が国民的な人気を博して今日の龍馬像は確立したと理解しております。司馬さんは尊敬する大学の大先輩でありまして、坂本龍馬について批判するのは私も非常につらいものがありまして、とはいえ、違うことは違うでしょうということです。

司馬さんの「竜馬がゆく」の「竜馬」という字は、実際の「坂本龍馬」という郷士崩れのような男の「龍」の字とは違いますよね。ですから、これは司馬さんらしくないといえば司馬さんらしくないのですが、すでに逃げを打っているわけです。「あれは小説だよ」ということですね。ですから、これはひょっとしたら私たち読者の方に問題があるのかもしれません。「リョウマ」、読み方は同じだけれども、この「坂本竜馬」と実際の「坂本龍馬」は字が違うではないか、これは別人ではないかと言われればそれまでです。

では、龍馬がひねり出したという「船中八策」はどうなんだと思われるかもしれません。あれは龍馬作とも何とも確証はありませんし、そもそも船中八策なるものが存在したのかどうか、それすら疑わしいですね。

それで、実際の坂本龍馬といいますのは、言ってみれば、今申し上げたグラバー商会のトラフィック兼営業担当というのでしょうか、そういう位置づけが実態に近いということです。

当時の長州藩は、平たく言いますと幕府からもう完璧ににらまれていて、にっちもさっちも動きがとれない。一方で薩摩は、もともと公武合体論ですから、倒幕なんか藩主は考えたことはないんですね。考えているのは西郷と大久保等の少数派でした。そして、薩摩がグラバー商会から武器を買う、それを長州へ流す。長州は金がないから、それを米で払う。薩摩は米が欲しい。三者ウィン・ウィン・ウィンということで、その三角取引が成立したわけです。だから、先ほどの２人は、そうやって薩摩藩士名義で長崎に出入りできたわけです。三角取引が成立したのはいいんですけれども、武器を誰が長州へ運ぶのか、ということで、グラバーが「ああ、うちに坂本というのがいるから彼を使おう」という話になったのですね。それまで、坂本龍馬は、たしか月３両何分かの給金で小松帯刀が飼っていた男でした。

勝海舟がいろいろなことを書いているじゃないかという反論がおありかもしれませんが、明治になってからの勝海舟の話というのはあまり信用できません。「氷川清話」とかいろいろな記録が残っていますけれども、あれを全部チェックしますと間違いだらけです。そもそも日付も、ひどいのは年度が違う、人の名前が違う。あれほど信用が置けないものはない――だから、あれは資料として使えないですね。たとえば咸臨丸のことをみずから語っています。初めて日本人の手で太平洋を横断したことについて、「これが日本で初めてだよ、俺がやったのが」というふうに実際に語っています、「氷川清話」の中でも。でも、これは真っ赤なうそでして、あれはアメリカ軍の士官が全部操船をしているわけで、勝は船酔いがひどくてこもりっきりで、それどころか艦長の木村摂津守が気に入らないので、ここでボートをおろせだとか、この嵐だから艦長にみずからやってもらえとか、そういうことばかり言って足を引っ張っただけというのが実態です。なぜそれが分かっているかといいますと、木村摂津守自体の記録もありますし、たまたまその船に福沢諭吉が乗っていた、小野友五郎も乗っていたということで、そのあ

たりの記録、証言を全部つき合わせますとそういうことになるということです。ですから、坂本・勝、強いてもうひとりあげますと吉田松陰、司馬さんの評価したこの３人が司馬さんの大いなるミスといいますか、私は罪だと思っています。

人物でいえばその３人ですが、事件で申し上げれば「桜田門外の変」について、「歴史を進展させた」という言い方で、司馬さんは桜田門外の暗殺を評価しています。集団であれ個人であれ、「この暗殺は歴史を躍進させた」とか、「この暗殺はだめだよ」とか、暗殺とテロを区分するということはどういうことなのでしょうか。それをやったら最後ですよ。それはヒットラーとか毛沢東と同じになってしまう。おおよそテロに、「これは正しいテロ」という考えを持ち込むことは間違いです。テロはすべからくテロで否定すべきです。私はそのスタンスですが、暗殺も然りです。暗殺という手段について、「この暗殺は正しい暗殺」とか「これはだめな暗殺」とか、それを言ってはだめでしょう。「教条主義」という言葉がありますが、それは教条主義者がよくやる手です。だから、一部の学者・研究者が、司馬さんと昭和維新の共通点というのをよく指摘されるのはそういうところですね。つまり「明治絶対主義」、「明治維新至上主義」に陥る、そこが、「司馬史観の罪」のもとです。あの３人とひとつの事件を高く評価したということが間違いのもとではあります。

今の坂本の例、勝の例、吉田松陰の例、そして薩長同盟の例、ここらあたりは歪曲の範囲に入るかと思います。こんな感じで、私たちは隠蔽という側面と歪曲という側面で官軍教育と通常言われております歴史を教わってきた。私自身がたっぷりとそれに浸かっていた、そういうことなんですね。

司馬史観の罪

戦後になって、さらにそれに拍車をかけたといいますか、それを固定的に確立したのが司馬さんの「司馬史観」ですね。３人とひとつの事件について特に申し上げましたけれども、これはもう少し根深いものにつながりまして、歴史の連続性を遮断しているということです。

明治維新至上主義の立場に立ちますと、どう考えても昭和に入ってからの軍国主義というのは困るんですよ。あれは、言ってみれば長州軍伐の産物なんですけれども、そうなると司馬さんとしては具合悪いんですね。ご自身でもおっしゃっていますけれども、「私は龍馬が好きで、好きで」と。それはいいんですよ。講演とか雑談程度でも「長州も好きで、好きで」と、それは結構なんですけれども、それが発展していって、明治はクリスタルのように合理性が尊重された時代で、昭和だけが、痛いと言っていいほど民族としての連続性を持たないという断定をしたのです。

したがって、昭和一ケタから敗戦に至るまでは、まるで異民族の歴史のように、美しい日本人の歴史とはまったく関連がないというニュアンスのことをおっしゃる。それが、後にどんどんその期間が短くなるんですけれども、この20年だけは、最後は昭和16年の近衛体制はとそこまで縮まってくるのですが、40年であれ、6年であれ、5年であれ、同じ民族の歴史を一部分だけ、これは民族としての連続性を持たないという言い方は承服しかねる。それはあり得ないでしょう。同じ民族の同じ歴史、1本の線、先ほど申し上げた同じ1本の線の上に絶対あるはずですから、なぜそこだけ遮断するのか。そこを遮断した方が、維新至上主義の立場に立ったときは都合がいいのです。ストンと落ちるでしょう。明治維新はすばらしい、美しかったとストンと落ちます。腑に落ちると思うのです。だから、そういうふうになってしまう。

北一輝もそうですね。今申し上げた昭和維新の理論的支柱というのは北一輝ですが、あれがあって例の2.26が起きますが、「治安維持法以前の日本が理想郷である」と、司馬さんとまったく同じようなことを言っています。つまり明治なんですね。そこが、学者さんがいろいろなネーミングをつけて、「社会民主主義」の立場ではないかとかいろいろな言い方がありますけれども、いずれにしても、先ほどのテロの区分といい、今の歴史の一部を、「これはちょっと連続性を持たない」というふうに葬り去る

ことは暴論ではないかとさえ私は思っております。

司馬さんという方は、私なんかは足元にも及ばない、ご存じの通り「知の巨人」と言われる非常に偉大な方で、私自身が大きな影響を受けていますし、まして大学の大先輩です。ただ、「先輩、ここは違うでしょう」と、これは申し上げざるを得ないですね。それは、その影響が自然と大きくなったゆえに「罪」と言っていいぐらいの影響力があると思います。

「明治維新」という過ち

そのようなポイントで、そもそも「明治維新」というのは、そういう誤りを全部史実に照らして並べられたとして何だったのだという話になります。

「「明治維新」という過ち」という私の本のタイトルの通りですが、どこが過ちなのだと言うと、前の時代を全否定したということです。これはよくありますね。政権が変わる、いわゆる古い言葉で言いますと「天下が変わる」といいますか、天下人が変わったりしたときに、前の権力者、前の政権、前の天下というものを、一部だけではなくて全否定しますね、何から何まで。これが大問題です。たとえば、明治になってお雇い外国人がたくさん日本に来て、ベルツ博士なんかもそうですが、帝大を中心にして教鞭をとるんですけれども、あるいは画家、医者、ビゴーなんかもそうですね。彼らの前で薩摩・長州出身の新しい華族、公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵、こういう人たち及びその関係者がなんて言っのたかというと、「日本には歴史はありません。これから始まるんです」という言い方をしています。それが倒幕勢力サイドの、言ってみれば思想ですね。その言葉に象徴されるように、その前時代、つまり江戸期というものを完璧に悪の時代として全否定した。これが過ちのひとつにつながるのではないかと思います。

それと、そもそも「明治維新」という言葉が、いつ普及したか、いつ一般化したかという問題です。

2.26事件を生んだ昭和維新運動という水戸学をベースにしたムーブメントあるいは政治運動がありました。結果的に、その前の5.15もそうですけれども、2.26事件という若手将校の反乱というものが起きるのですが、あのときに東京は全部戒厳令が敷かれましたね。戒厳令というと、私たちはまったく自国には関係ないことのように思っていますけれども、東京には戒厳令が敷かれたことがあるわけです。ちょうど東日本大震災で九段会館の天井が落ちましたが、あの九段会館は反乱を鎮圧する司令部が置かれた場所です。その横に昭和館というものが今、立派に建っていますけれども、戒厳司令部のあったのがあそこの交差点のちょっと先の九段会館です。あのころの――あのころというと、私が生まれるたかだか10年前です、昭和11年ですから。そのころ、「明治に回帰しよう」と、明治を理想郷のように位置づける、「昭和維新」と言われた運動が熱を帯びてきて、この辺が北一輝の影響かと思いますが、そのときに「明治維新」という言葉が一般的に普及しました。もちろん動乱の直後にも「維新の大業」という言い方、もともとこれは水戸学の言葉ですが、そういうことがありましたけれども、「明治維新」という言葉が一般の方々に定着したのは昭和維新のときです。そこにもすでに誤解があります。

水戸学の言葉としての「維新」は「天誅」、つまりテロリズムをやって事を新たにするということを内包しています。ですから、橋下さんが「日本維新の党」をつくったときに私はびっくりしました。別に橋下さんがテロを起こすつもりはさらさらないと思うので、単に知らなかっただけということですけれども、「維新」という言葉をよく勇気を持って使ったなというのが最初の印象でした。

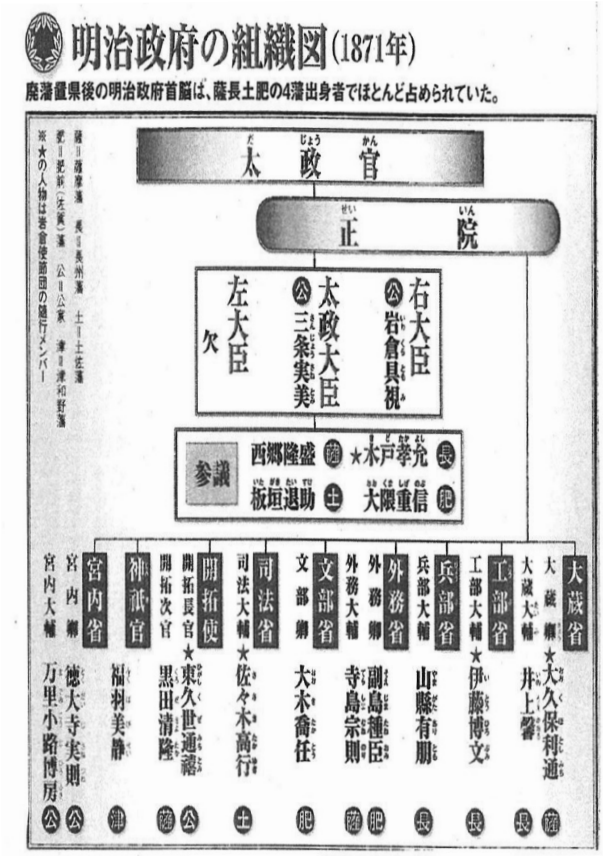
この「維新」という言葉自体が水戸学と深い関係があるのです。水戸学は、国学の鬼っことでもいいますか、天皇を神格化するひとつの学問なわけです。元凶は水戸黄門です。そこから始まっているんですけれども、いずれにしても前の時代を全否定してしまったということです。

それと、そもそもあの維新運動はなんのグランドデザインも持っていなかった。幕府を倒そう、慶喜を倒そう、それだけですね。じゃ、倒してどうするの、後どうするの、という青写真がまったくなかったのです。ここが大

問題で、じゃあどうしたかというと、実は幕末の幕府にそれはある程度用意されていたのです。幕末の阿部正弘政権、井伊直弼政権、あのあたり――堀田正睦政権を入れてもいいのかもしれません。あのあたりの政権に、私はテクノクラートとあえて認識していますが、小栗上野介、水野忠徳、岩瀬忠震、川路聖謨、井上清直、といったそうそうたる者たちがいました。彼らがつくった、あるいは彼らが構想していたことをそのままやるしかない。たとえば、廃藩置県は小栗の郡県制を実施したものですね。また、横須賀に製鉄所、あの時点の製鉄所というのは造船所のことですが、それも幕府の構想のままです。それで議会、これも小栗の公議政体そのままです。幕臣の西周もそれを慶喜に献策していますけど。ですから、幕末の優秀な官僚の中には、慶喜を大統領にした政体という構想がありまして、その公議政体というものをどうやってつくるかという構想があったんですね。それを踏襲した。したがって、さすがの司馬さんも小栗のことを「明治の父」と呼んでいますけれども、「明治の父」と呼ばれる人間は全部、今申し上げた３つの政権の時代の幕末の優秀な幕府の官僚であったという言い方もできます。

どこまで復古すれば気が済むのか

もうひとつの過ち、これが大きいのですが、司馬遼太郎さんには「「明治」という国家」ですとか「「昭和」という国家」という著書といいますか講演録があるのですが、その他の方々もそうですが、明治になって初めて四民平等になって「国民」をつくったということをよくおっしゃる。「国民」をつくったと。でも、これはとんでもない間違いで、国民たるものはひとりもつくっていないですね、倒幕勢力というものは。つくったのは「皇民」であります。天皇の赤子、みんな天皇の子供であるという「皇民」はつくりました。「国民」はつくっていない。司馬さんが、勝海舟のことを評価するときにこういうことをおっしゃる。「確かに勝のやったこと、これも、これも、これもめちゃくちゃです。でも、勝の場合は許されるんです」と、こういう言い方になる。なぜ勝の場合は許されるのだ。坂本



出所：別冊宝島『日本近代史「明治維新」という嘘』監修　原田伊織

と並んで、国民をつくったひとりだからですと。これは、ちょっと腑に落ちないですね。

そもそも明治の最初の政権、太政官政府といいますか、それが資料にお配りしたような仕組みになっています。

維新でどこへ復帰すればいいんだということで、これは律令時代の名称ですね、全部。この太政大臣は三条実美というのはどういう人間か。長州過激派に操られただけです。８月18日の政変というものがありまして、孝明天皇の怒りを買って都落ち、いわゆる「七卿落ち」、たぶん歴史の時間で習われたと思います。七卿落ち、７人の公家が長州に落とされた。そこから後、長州はずっと朝敵ということになるのです。その長州過激派に操られて朝廷をうまく操縦しようとしていた三条にたいして、孝明天皇が堪忍袋の緒を切ったみたいなことなんですが、政権がひっくり返ったときには、その七卿落ちで長州へ落とされたことのみが勲章になるんですね。その勲章だけで太政大臣をずっと務めます。それで下級公家だった

岩倉が右大臣。左大臣をなぜ空けてあるか、岩倉が後で自分で就任するつもりだったのでしょう。大蔵ですとか、工部、兵部、外務、これは全部律令時代の名称ですね。確かに復古政権です。

では、どこまで復古すればいいんだということですが、このときにできた神祇官は、あまりやることがないので何をやったか。日本中の寺という寺、僧侶、仏教の弾圧ですね。つまり、日本の伝統文化の破壊です。タリバンが仏像を爆破したりしましたけれども、あれと同じですね。興福寺、内山永久寺――このうち内山永久寺は、この地上から姿を消すぐらい破壊されましたから。奈良の興福寺も、今は奈良ホテルですとか奈良県庁のそばですけれども、あれは全部興福寺の敷地だったのですが、興福寺の五重塔は25円、一説では15円で売りに出されて、興福寺の経文というのは、包装紙にするために町方に二束三文で売却されたのです。このように徹底的に仏教は弾圧されました。なぜか。これは外来のものだからです。尊皇というのは、神代の時代からわれわれがかくかくしかじか守ってきた大切な信条であったということで、仏教までも外来だと言い出したのです。

では、どこまでさかのぼれば気が済むのということになるのですが、それは建前の世界です。やっている実際は西欧崇拝といいますか、とにかく西欧文明を模倣しろということですから、これは非常に極端なんですね。たとえば明治30年代ぐらいになりまして、大山巌という日露戦争の陸軍の総司令官がいますけれども、彼のところへある男が「閣下、あのときはたしか、尊皇はいいんですけれども、攘夷ではなかったですか。尊皇攘夷ではなかったんですか、われわれは」みたいなことを大山に言った。どこまで本気で言ったのか、嫌味で言ったのかもしれないですけれども、そのときの大山がたった一言、「あのときはあれしかなかったんです」と、そんな程度なんですよ、尊皇攘夷というお題目は。

世界は「江戸」へ向かっている

中谷理事長は経済学の権威でいらっしゃいますので、

原田氏

その前で非常に僭越なことを申し上げますけれども、昭和20年代というのはマルクス経済学がほとんど主流といいますか、力があったと理解しておりますが、その中でもやはり講座派だと思われますし、その講座派の連中が結構、この考え方を定着させてしまったという面はあるかと思います。しかし、人間の歴史というのは教条的にはいかないでしょう。生身の人間が喜んだり、悲しんだり、怒ったり、それに付随して起きるいろいろな出来事が喜びも悲しみも一緒にして堆積していく、その積み重ねが歴史だと思われます。しかし、たぶん講座派の人たちはそうはとらないのですね。そもそも大前提が「人間はホモ・エコノミクスである」ということであったかと思います、初歩的な話で恐縮ですが。そういう歴史観ではとらえられないだろうと思います。たまたま今は、ニューパラダイム派ということなんでしょうか。このあたりは逆にお教えを請いたいと思いますが、もうパラダイムがシフトしていくということはよく言われていることかと思いまして、おそらく皆様も、日ごろのお仕事を通じてそういうことはひとつの軸として論理を組み立てて、いろいろコンサルティングにも当たっていらっしゃるのではないかと思います。

前の時代を全否定するというような歴史観は、もうそろそろ終焉と言っていいかと思うのです。たとえば、日本でいえば堺屋太一さんが「知価社会」ということをよくおっしゃいました。個人の納得ですとか好みですとか、そういうものが物財よりも価値を持つ、なおかつそれが

具体的な財を生む、そういう社会がポストインダストリアル社会、つまり脱工業化社会の姿だということをしきりにおっしゃったかと思うのです。それが具体的にぴったり正解かどうかというのはこれから出ると思いますが、ただ、その動きはおそらく80年代にイギリスとアメリカで始まっているはずですし、日本では20年遅れて始まっているはずですし、皆さんの身の回りに起きていると思います。街で起きていること、そういうところへの影響といいますか、社会的な価値観の影響を受けた現象というのがいっぱい出てきているはずで、それを見逃すなということですね。

私は、よくスタッフに言うんですけれども、そういうものを「時代の気分」というふうに呼んでいます。かつて私の若いときには、京都の町家がブームになるなどということはあり得ない。田舎者の私ならともかく、若い女性が風呂敷だ、手拭いだと、そんなもの相手にするか、当然相手にしなかったですね。フランス人が、何であれほど「豆腐、豆腐」と言うのだ。彼らの発音だと「トーフー」と言うらしいんですけど。それで「もったいない」、そんな言葉がなぜ国際語になるのだ。「おもてなし」もそうですね。

もっと卑近な例で申し上げれば、きょうお帰りのときに、どこかでひょっとしたらそういう光景に出会う方がいるかもしれませんが、町の酒屋さんの入り口の一杯飲み屋みたいなところ、酒屋さんとカウンターで飲む場所が一緒になっているような店があったりします。あれは、かつてはおっさんの世界だけの話で、そこへなぜ若いか女性が行き出した。もっと申し上げれば、新橋というのはおっさんの町でした。それが、なぜ若い女性が新橋を席巻するようになったのか。席巻と言っていいぐらい、一時若い女性が大変な数になりました。それが新橋の主流になって、それは、ちょっと今はすたれましたけどね。ただ、ニュース番組なんかを見ていると、サラリーマンイコール新橋と定型でそこに聞いたりしている。あれは新橋の今の実態ではないですね。飲み屋さんを全部回ってみて、代表性はどこまであるかという話ですよ。

そういうふうな日常私たちが目にできる現象、そこに地下水のように流れている新しいパラダイム、その影響が出ているはずです。そこが時代の気分をつかまえるという作業で、とても大事なことで、それなくして企画書は書けないと私はよく言います。あんな不便な京の町家に真っ先に惚れ込んで、麻生圭子さんでしたか、向こうへ住み着いちゃったんですけれども、それは今から15年ぐらい前の話で、それからずっとそうなっている。

そもそも今居酒屋へ行って、あるいはちょっと高級な居酒屋といいますか、ほとんどが純粋な和ではないですね。フレンチの要素がどこかに入っているということですとか。また、若い20代の女性がなぜ花火職人になるのだ。それが何で許されるのか。なぜ杜氏、酒蔵に入って酒を発酵させるのが杜氏ですけれども、あれは女人禁制の世界ですね、伏見でも灘でも、どこへ行っても。なぜ女人禁制か、あれは髪の毛が落ちるからですね。別の理由もありますけれども、それを押して、私はどうしても酒をつくりたいという女性が登場している。ですから、なぜそういう現象が起きるかということです。そこの「なぜ」という部分が、「世界は「江戸」へ向かっている」というところへ最終的に結びつくと私は信じております。海外の学者が先に江戸を評価し出して、海外で評価されると、たいがい日本の学者さんは評価します。お決まりのパターンでありますが。

世界史には大きく分けて、古代、中世、近代という時代区分しかありません――ありませんと言うと言い過ぎかもしれませんが、それで済むんですね。ところが、日本史を論じる場合は、古代、中世、その後に近世、その後に近代というふうに近世をはさまないと説明ができない。かつて、舛添さんの原稿に赤を入れて、彼が近代と書いたところを近世と書き直して返した。そうしたら、また彼は近代と書き直して戻してくる。分からないなと、また書き直して、何回も往復して、あまりにも納得しないので、そのまま近代で通しましたけれども、つまり、国際政治学者として華々しく登場した舛添さんは向こうの歴史の近代しか知らなかったのでしょう。その「近世」という

ものを今、海外の学者が評価し始めている。この「ということは」という後がこれからの私たちの仕事、皆様方の仕事ではないかという気がしております。

　済みません。あちこち飛びながら、はしょりながらで乱雑な話になりましたが、ここで一応締めさせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

質疑応答

【司会】 原田先生、どうもありがとうございました。

それでは、限られた時間ではございますが質疑応答という形にさせていただきます。

【質問】 どうもありがとうございました。きょう、直接原田先生のお話をお聞きできるということで、とても楽しみにしておりました。本当にありがとうございました。

せっかくの機会なので、ぜひ３つばかりお聞きしたいことがあって質問させていただきたいのですけれども、まずひとつ目ですが、私なんか、まさに薩長サイドがつくった歴史教育を受けた人間なので、この本を読ませていただくと、まるで信じられないというか、SFを読んでいるのではないかと思ってしまったわけなんですね。しかし、先生がこうやって書いていらっしゃるわけですから、たぶん本当なんだと思いますし、それと、もしこれが名誉棄損に当たるのであれば、たとえば吉田松陰の子孫であるとか、東北に行った世良の子孫からたぶん訴えられているというようなことになるのでしょうけれども、そういうことはない。そうすると、これはたぶん本当のことなのかなという感じはしたのですが、あまりに歴史教育で学んだことと違いがあるので、にわかに信じられないという部分も多いのです。質問としては、なぜ今までこのような本というか、こういうようなことが世の中に出てこなかったのかなということがひとつ。

それから２つ目ですけれども、確かに、司馬遼太郎さんが書いた本にすごく影響を受けているなと思うんですね。追い打ちをかけるように、たとえばNHKの大河ドラマでも「竜馬がゆく」とか「花燃ゆ」とかいろいろやると、あの辺がとてもキラキラ輝いている感じに見えるわけですね。そうしますと、「知の巨人」と言われる司馬遼太郎さんでしたら、膨大な資料を読んでいらっしゃるわけですから、たぶんいろいろな自分の考えと違ったような資料もたくさん、きっと遭遇したと思うのです。でも、そこを切り捨てたというのか、何かよく分からないんですけれども、そうすると、確信犯でそういう美の方向に導いてしまったのか、それとも本当に信じて、たとえば龍馬とかそういうものに対して心酔していったのか、どちらだと原田先生は思っていらっしゃるのかというのが２つ目。

それから３つ目なんですが、長州テロリストということで長州のことがよく出ていると思うのですけれども、長州が、要するに陸軍の思想のもとになり、その陸軍が悲惨な戦争に日本を導いたというようなことの連続性があるのではないかということが書かれていました。そして、たとえば、もし歴史で「たられば」がなければ、もしかしたら日本はスイスのような国になったかもしれないということも書いてあります。そうしますと、パッと私が思い浮かんだのは、今の首相は、たしか長州の人だなとちょっと思ったわけですね。そうすると、これは遠巻きに安倍晋三さんの内閣に対する批判も入っているのかなと思ったので、その３つをぜひ直接お聞きしたいと思いました。よろしくお願いします。

【原田】 最初のご質問、なぜ今までこれをお書きになる、あるいは発表される方がいらっしゃらなかったのか。これは、まったくいらっしゃらなかったわけではないです。内容的に、この部分は誰それさんもおっしゃっている、というのはあります。ただ、それをやると、私がそうですけれども、かなりバッシングを受けるんですよ。「ふざけるな」ということで、たとえば某自治体の首長の方が、「最近、原田というのがこうこうこういう本を書いているけれども、これは買ってはならぬ、読んではならぬ」という訓示をされました。これは厳密に言いますと――厳密に言わなくても地方公務員法にも違反しますし、言論統制の極みではないかということになります。

なぜそれが分かったかというと、それを聞いていた職員の方が、今ブログですとかいろいろありますからそこへ書いてしまった。それをある週刊誌の記者が見

た。それで長州へ取材に飛んだ。あっ、言ってしまいましたね（笑声）。長州のどこかの自治体です。それでコメントをとってきて、私のところへお越しになりまして、誰それがこうおっしゃっている、誰それがこうおっしゃっている、それに対する見解はと、そういうことが、暮れからことしの初めにかけてございました。つまり、それほどちょっと怖い話ではあるんですね。今でも、名前を書かずにファックスなり手紙というのがよく参りまして、まあひどいものですよ。ですから、それが大きな要因ではなかったかと思います。

それがすべてかどうかというと、ちょっと疑問ですけれども、ただ、タイトルを含めまして、ここまではっきりとしたものがあったかどうかというのは、ちょっと首をひねりますが、５年前に同じタイトルで同じ内容の本を出したら、まず売れていないと思います。つまり、先ほど申し上げた、今パラダイムが変わっているという、今の時代だから、皆さん、それを気づいてくださるといいますか、中には読んでくださる方が出てくる、そういうことだと思います。

それと２つ目は司馬さんの件でしたか。あの方の個人的な体験、陸軍戦車隊に対する司馬さんの嫌悪感、これは強烈なものがありますね。それを通じて、日本という国はなんてつまらない、くだらない戦争をしているんだということをあちこちで書いたり、おっしゃったり、これが強過ぎてということがひとつ大きな要因としてあると思います。それで、司馬さんのおっしゃることで確かにごもっともというのは、幕末動乱についてもたくさんあります。今、司馬史観の罪ということで浮き彫りにしましたけれども、これは、確かに司馬さんのおっしゃる通りということはたくさんあります。司馬さんには私も影響を受けています。ですから、個人の好みとか好き嫌いがあって、司馬さんは小説家ですから構わないと思うんです。問題は、その読み方だと思うのですね。

たとえば「坂の上の雲」にしましても、確かに、あの日露戦争というのは防衛戦争という側面が強いと私も

原田氏

思いますが、本当にあの通りだったらどうかというと、これはちょっと違いますね。あのときに国際的にも評価を受けた軍人たちというのはどこの誰だったか。元桑名藩がいたりということですね。愛媛、松山藩の秋山兄弟というのはそうですね。あれは賊軍にされた藩でして、土佐から500人ばかりわーっと来て松山藩はえらい目に遭っています。だから、秋山好古は、終生土佐を憎んでいますね。たとえば彦根藩にもそういうのがいまして、日露戦争の二百三高地で「白襷隊」という抜刀して切り込むという部隊がいましたが、これは全滅しました。それをやったのは、たしか中村という彦根藩の藩士です――私の田舎の彦根藩ですけれども。そして、彼らは一様に何を言ってやっているか。「賊軍の汚名を晴らす」、これを合言葉に全部やっている。そういうことがありますから、おそらく司馬さんはそういう現象に感銘も受けられたでしょうし、それを小説という形であらわされた。

司馬さんは確かに膨大な資料を集めておられた。ただ、典型的な事例で申し上げれば、司馬さんほどノモンハンの資料を持っていらっしゃる方はいらっしゃらない。しかし、「嫌だ、書かない」と。なぜか。ノモンハンについては書く気が起きない、汚い。幕末は書いても、戦後はあの人は書きません、ほんの一部しか。なぜか、汚いということです。ひとつはそういう司馬さんの、好みというとふさわしくないかもしれませんけれども、そういうキャラクターの問題と、戦車隊にいた

ときの理不尽なされ方といいますか、それが司馬さんの神経には耐えられなかった。その昭和陸軍に対する恨みみたいなものが明治の美化へつながっている部分はあると思います。

それと３つ目が、「アベ」といいますと、私は阿部正弘のことしか思い浮かばないぐらいでして、そういえば、あの方はそうだよねという程度なんですね。たしか、吉田松陰を尊敬する人にあげていたかなと。同じように、日本共産党の宮本顕治さんですとか野坂参三さん、みんな長州の方ですが、あの方々も含めて日本は右も左も尊敬する人の第一に吉田松陰ということです。あまり私は、安倍さん個人にどうこうというのは、まったくないですね。個々の政策論になって、これはこれで、むしろ野党の言っていることより安倍さんの言っていることの方がまだましという政策もあると思いますし、逆もあります。ですから、これに関しては安倍さんということは意識していなかったです、正直。

よろしいですか。お答えになったでしょうか。

【司会】 ありがとうございました。

もうお一方ぐらいいかがですか。いらっしゃいますでしょうか。

【質問】 本当に大変すばらしいお話をありがとうございました。ご著書の方も事前に読ませていただいて、大変感銘を受けました。

きょうは、ちょっと時間がなかったので、たぶんこのご著書で書かれていることの一部しかお話ししていただけなかったと思いますけれども、特にご著書の第５章の「二本松会津の慟哭」は、やはり白眉かなと思います。

それで質問は、この本から少し離れてしまうことになるかもしれないのですけれども、先生のご意見をお伺いしたいと思います。

この本の中では、主に国内の動乱のお話を書かれていますが、そのときの国際的な動向といいますか、特にイギリスという国の思惑をどうお考えなのかというところをお聞きしたいんですね。この第５章の中で、

薩長の軍備と、それから賊軍にされた奥羽列藩同盟の軍備も比較されていますけれども、結局これは、主にイギリス製の最新兵器で勝ったという分析ではないかと思うのです。それで、薩長というのはご案内の通り、この直前にそれぞれイギリスと戦争していますね。先ほども事実として出ましたけれども、長州の場合は下関戦争、馬関戦争を1863年から1864年に。それで、薩摩は薩英戦争を1864年にやっていますと。普通に考えると、戦争をした国とその後急速に仲良くなるという事態はあまり考えづらいと思うのですね。

もちろん、かつての歴史等で習った説明によると、この両藩は、イギリスと戦争したことによって攘夷というのは不可能だと直ちに悟り、急速にイギリスに接近して、その軍備を取り入れた、こういう説明になっていると思うんですけれども、このときイギリスは何を考えていたのだろうか。ひとつの仮説として、一方でイギリスがその後どういうことを世界にしていったか。たとえばサイクス・ピコ協定の話とかを考えると、これは国内で内戦を起こさせておいて、その後、列強と日本を分割しようと考えていたのではないかなというふうに思うんですけれども、その辺のお考えはいかがでしょうか。

【原田】 たいがい、今お話の通り、私たちも同じような教育を受けて育っておりまして、あの戦争を通じて攘夷の不可なことを悟ってというような教えられ方をされました。ただ、これは違いますね。特に薩摩の場合は、それの２～３代前から蘭癖大名、つまり今で言います

と、蘭癖というのは西洋かぶれという意味ですけれども、強烈な西洋かぶれの大名が藩主になっていた藩でして、そのころからイギリスとは深い縁でつながっております。それで、今名前が変わりまして「鹿児島中央駅」というふうになっていますけれども、あの前に12人の「若き薩摩の群像」というような青春の群像が、五大友厚、森有礼等がありますけれども、あれは、長州五傑と同じように密出国で秘密留学した侍たちです。それぐらいイギリスとは両藩とも縁が深かった。縁が深く、支援も受けていた。

問題はイギリスサイドですけれども、ジャーディン・マセソンという会社、今も存在しますが、それがあの時点で清国――中国の侵略、アヘン戦争等の手先、お先棒を担いだといいますか、ジャーディン・マセソンの存在なくしてアヘン戦争というのはない。ご存じかと思いますけれども、ジャーディン・マセソンはイギリスの東インド会社の分身みたいなものです。後の時代の名称ですから、もとは東インド会社です。イギリス本国の政治と極東の出先でやっていることは違うんですよ。極東の出先がしょっちゅう暴走しているんですね。それで、イギリスのパーマストン内閣のときはそれでよかったわけです。強烈な砲艦外交を展開した内閣ですから、これはヨーロッパ各国からも恐れられていた。パーマストン内閣だから東インド会社の血を引くといったようなものであるジャーディン・マセソンはあれほどのことができた。

ところが、日本にとっては神風が吹いたといいますか、パーマストン内閣が、何とつぶれるんですね。パーマストン自体が急死といいますか、病死といいますか、これは、まさに神風でして、そうなると、東洋の出先は勝手な動きができなくなってしまった。したがいまして、日本国内が倒幕という具体的な動きに入ったときには、イギリスの方には日本侵略という目論見は消えています。ですから、そこも官軍史観、ちょっと公教育のあれと違ってくるのですが、これはイギリス本国の基本的な方針としてできない、だめとストップをかけていますから。初代公使のオールコックのときはパーマストン内閣でいけた。パークスのときになると、できなくなった。それがひとつあります。

それとイギリス、これはアメリカも同様ですけれども、日本という国を見たとき大君政府、つまり幕藩体制といいますか、あれを見たときに、下関戦争の例を見ればよく分かるんですけれども、確かに、あれでもって簡単にひとつの藩は制圧できるんです。ところが、60余州300諸侯とまで言われて、60いくつの国に分かれて約300名、正確には270名前後の大名がいて、それが不完全とはいえ、それぞれ軍備をしている。言ってみれば、究極の地方分権かもしれません。

徳川幕府というのは、実に小さな政府でした。ここがポイントで、私たちはついつい徳川という強力な政府が軍事力、武力でもって各藩を抑えていたような錯覚をしますけれども、それはまったくないですね。幕府直轄はたかだか400万石です。日本全国はだいたい3,000万石です。徳川直参旗本、御家人たちは400万石、そして徳川本家だけとればたかだか400万石です。一方で、外様ですけど加賀前田藩は102万石、やはり外様ですけど島津は約78万石ですので、そうしますと、ほとんどイーブンで戦争できそうな感じでもあるんですね。そこが問題でして、そうしますと、徳川体制というのは思い切り小さな政府にならざるを得ないんです。その分各藩が、ある意味独自に貨幣を発行し――藩札ですね、独自の統治システムを実施していました。直轄領には代官を置いています。この代官というのは非常に優秀です、勘定所から派遣されていますから。水戸黄門の世界で悪代官というのがいますが、あれは真っ赤なうそです。逆です。手付・手代という10人弱の人間で10万石ぐらいを全部、行政も司法も見るわけですから、代官というのは優秀です。そういう体制において、下関をひとつ落としたら、さあ、次はどこを落とす、これを全国やるのか。いくらイギリスが世界の7つの海を支配したからといって、この島国で一気にそれができるかというと、できないですよ、

あの体制は。つまり、中央集権体制ではなかったということで、これが幸いしていますね。ですから、そういう徳川の統治体制の問題と、ポイントはパーマストン内閣が倒れたこと、これが大きいと思います。

ちなみに武器は、アメリカで南北戦争が終わりまして、それがどっと流れてきたということが大きいですね。お答えになりましたでしょうか。

【司会】 どうもありがとうございました。

では、時間がかなり押しておりますので、最後に理事長、一言だけよろしゅうございますか。

【中谷理事長】 どうもありがとうございました。大変おもしろい話でした。確かに、明治維新については「薩長史観」で、そして、戦後は「マッカーサー史観」のもとに教育を受けてきましたから、われわれの考えの中には、勝者の論理による歪みが色濃く受け継いでいるのだと思います。

それに対して、先生からは、そういう見方は一方的過ぎる、裏側にあるものをちゃんと見る必要があるというお話を伺いました。これはバランス上非常に良かったと思います。ひとつだけ気になるのはテロリズムを司馬さんが肯定したという点です。幕末に頻発したテロリズムがちゃんと総括されないまま昭和に入ってしまった。日米開戦がなぜ起こったかということを考えたときに、ひとつの要因としては、戦争反対を声高に言い募ることに対して、陸軍の若手将校のテロに対する恐怖感というのが、大戦前の日本社会では非常に強かったことが挙げられると思います。5.15、2.26事件が起こり、それに対しても明確な粛清は行われなかった。正義のためなら何をやってもいいんだというテロ容認の傾向に大きな問題があったと考えます。

問題は、明治維新にはどういう大義があったのかという点です。その点をさておくとして、政変には、テロや大量の殺戮がつきものですね。フランス革命のときは、少なく見積もって60万人、そして多く見積もると200万人の犠牲者が出た。日本の明治維新が世界的にすごいねと言われている理由のひとつは、犠牲者がたかだか3万人だったということなんですね。確かに会津討伐とか、理不尽なことが行われたのは確かであり、これが非難されるべき事件であったことは間違いありません。実は私の女房の先祖が会津でして、北海道に開拓使として追われたという歴史があるのでいつでも聞かされているんですね。「薩長、けしからん、けしからん」と。きょう、本当は呼んできて聞かせたかったぐらいなんですけど。（笑）

中谷理事長

フランス革命においては、「近代というものをつくり出すため」という大義のために200万人の人間を殺した。ただ、その後、フランスを初め西欧諸国はそれをどういうふうに総括したかということが問題です。

日本の問題は、確かに維新の犠牲者がたった3万人と少なかったとは言え、テロリズムの是非に関する総括が終わっていないという問題があって、今、日本の戦前の総括ができない理由も、さかのぼると明治維新のテロリズムの総括が終わっていないというところにあるかなという問題提起はすごく重要だと思います。

つたない感想ですけれども、本当にありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。本日は終了でございます。

開催日：2016年5月20日